

カヤネズミの球巣構造と巣内残留物

宅間友則¹・鮫島正道²

¹ 〒 895-0012 鹿児島県薩摩川内市平佐町 2416 新和技術コンサルタント(株)

² 〒 899-4395 鹿児島県霧島市国分中央 1-12-42 第一幼児教育短期大学内鹿児島県野生生物研究会本部

■ はじめに

カヤネズミ (*Micromys minutus*) はネズミ目ネズミ科に属し、成獣でも頭胴長 50–80 mm, 尾長 61–83 mm, 体重 7–14 g 程度の小さなネズミである(図 1)。本州の宮城県及び新潟県・石川県以南、四国、九州に分布し、島嶼では隠岐諸島、淡路島、対馬、口之永良部島などが知られているが、詳細ではない。主に低地から山地(標高約 1,200 m まで)の茅場に生息し、種子や昆虫類を食べているとされている。1 回に生まれる仔の数は 2–8 頭である(阿部ほか, 2005)。繁殖期は主に春季と秋季で、育児はイネ科やカヤツリグサ科を材料とした直径 7–10 cm 程の球形の巣(以下、球巣)で行われる(図 2)。球巣はカヤネズミの生息の有無を確認できる唯一のフィールドサインであり、多様な情報を内包している。

カヤネズミは生活史の大部分を茅場に依存するため、ある程度まとまった面積の茅場が必要であり、古くから茅を利用してきた我々人間の生活圏周辺で共存してきた。しかしカヤネズミは我々人間に対し“益獣”や“害獣”といった括りに当てはまらないことから、特に注目されることもなく、しばしば自然的・人為的攪乱にさらされているのが現状である。さらに従来からの河川整備や農業形態の変化から、茅場の消失や劣化が進行しており、国内の既存分布域のおよそ 6 割の地域で、絶

滅危惧種等の希少種に指定されている(全国カヤネズミネットワーク, 2003)。鹿児島県内では川内川流域や肝属川流域他、複数の産地が知られているが、その一方で県レッドデータブックにて絶滅危惧 II 類に指定されている(鹿児島県, 2003)。従って、カヤネズミの生息環境保全に向けた効果的な対策の検討が求められており、諸生態の解明は急務と考えられる。

カヤネズミの生態や分布については、白石(1964)、鮫島(1997)、畠(2000 他)、船越(2004)他による研究や情報収集がされており、営巣については宮田(2005)による観察記録がある。しかし生態や繁殖行動については未解明な部分が多く、報告は断片的である。本報告では球巣調査によって収集されたデータをもとに、既存知見との比較を行うとともに、生態解明を試みた。

■ 調査地と調査手法

調査は川内川流域 7 地点にて、2009 年 8 月から 2009 年 11 月にかけて実施した(図 3)。調査地点の環境は川内川堤外の茅場とし、調査手法はフィールドサイン法による球巣調査を実施した。各調査地点を 2–3 人で踏査し、球巣の位置や内部構造、巣材、残留物等のデータを収集した。育児中のものは後日回収し、同様にデータ収集を行った。球巣の内部構造については、外層と内層の 2 層構造とする見解と、3 層(白石, 1964)ないし 4 層に区分する見解がある(子安, 1994)。本調査では、巣材幅が 1 mm 以下で、外層から分離可能な「内層」が視認できる球巣を 2 層構造とし、造りが比較的粗雑で明確な内層が見られない球巣を 1 層構造として区別した。また球巣内に残され

Takuma, T. and M. Sameshima. 2011. Globular nests and residual feces of *Micromys minutus* along the Sendai River, Kagoshima Prefecture, Japan. *Nature of Kagoshima* 37: 31–37.

✉ TT: 2416 Hirasa, Satsuma-sendai, Kagoshima 895-0012, Japan (e-mail: t-takuma@net-shinwa.co.jp).



図1. カヤネズミ (尾を草に巻いて移動：○印).



図2. カヤネズミの球巣.

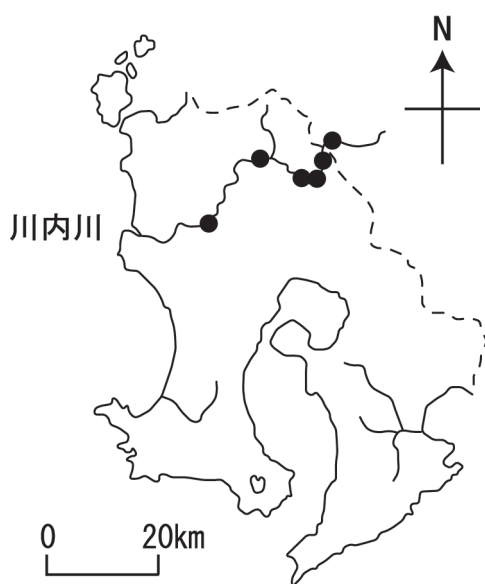


図3. 調査地点 (●). 夏季: 2009年8月18～20日; 秋季: 2009年10月31日～11月1日.

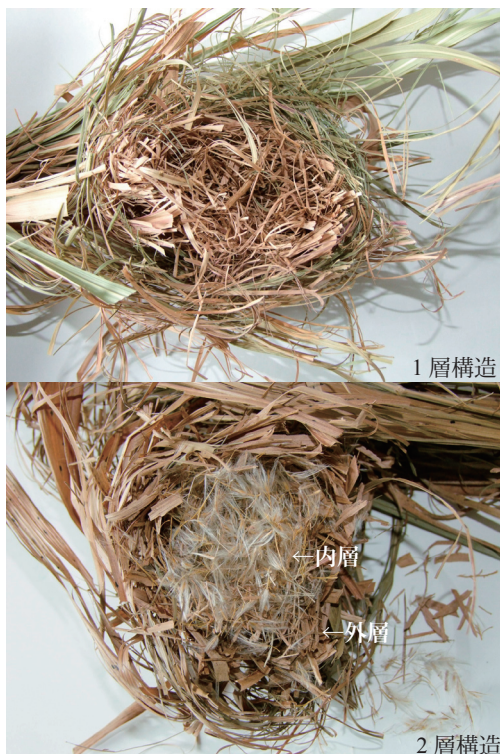


図4. 球巣の構造 (断面).

た糞は長径で区分し, 2 mm 未満を小糞, 2 mm 以上 6 mm 未満を中糞, 6 mm 以上を大糞として計数した.

■ 調査結果

①球巣調査結果

球巣調査で確認されたデータを表1に示す. 球巣は夏季に61個, 秋季に57個, 合計118個確認された. 構造別では, 夏季の完成44個中, 1層は19個, 2層は25個であり, 約57%が2層構造であった(図4). 秋季は完成45個中, 1層は11個, 2層は30個(不明4個)であり, 約67%が2層構造であった.

巣材は夏季・秋季ともにオギを使用した球巣が最も多く, 約7割の球巣で使用されていた. 夏季は外層・内層とも, オギの葉を裂いたものが多く使用され, 一例だけ内層にメリケンカルカヤの穂を使用していた. 秋季は, ほとんどの外層は夏

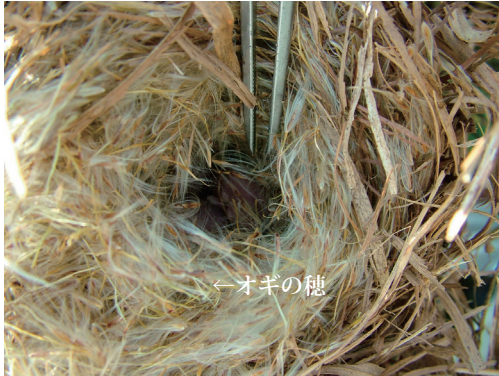


図5. 内層に穂を使用した球巣 (No. 74).



図6. 無毛幼獣 (No. 49).

季と同様オギの葉が使用されていたが、内層にオギの穂を使用したものが17個確認された(図5)。球巣の高さは、使用されたオギの高さ 1.85 ± 0.51 m (平均値 \pm 標準偏差, $n = 84$) に対し、地上から 1.25 ± 0.42 m (平均値 \pm 標準偏差, $n = 84$) であった。巣材はオギの他にもチガヤ、メヒシバ、イネ等16種の植物が使用されていた。

球巣内では No. 38, No. 39, No. 49, No. 55, No. 74, No. 99 で幼獣を1-6個体確認した(図6)。No. 57 では逃避する成獣を1個体目撃した。球巣内の残留物は No. 27 と No. 111 で幼獣の死体、45個の球巣で糞粒を確認した。長さ2 mm以下の小糞は球巣あたり1-50個以上確認され、6.1 mm以上の大糞は少なかった。また15個の球巣で昆虫の殻片や脚部、前羽、種子等を確認した(図7)。

② 幼獣の体温調節行動

2009年9月7日、No. 49の球巣で体温調節を行う3個体の幼獣を撮影した(図8)。巣外に出ていた時間は2-3分であり、その後は巣内へもぐり、再び外へ出てくるという行動を繰り返していた。2009年9月は、秋季に入ったものの各地で連日最高気温 $32-35^{\circ}\text{C}$ の猛暑が続いており(図9)、当日は観察者も大量の汗をかくほどの暑さの中での撮影であった。

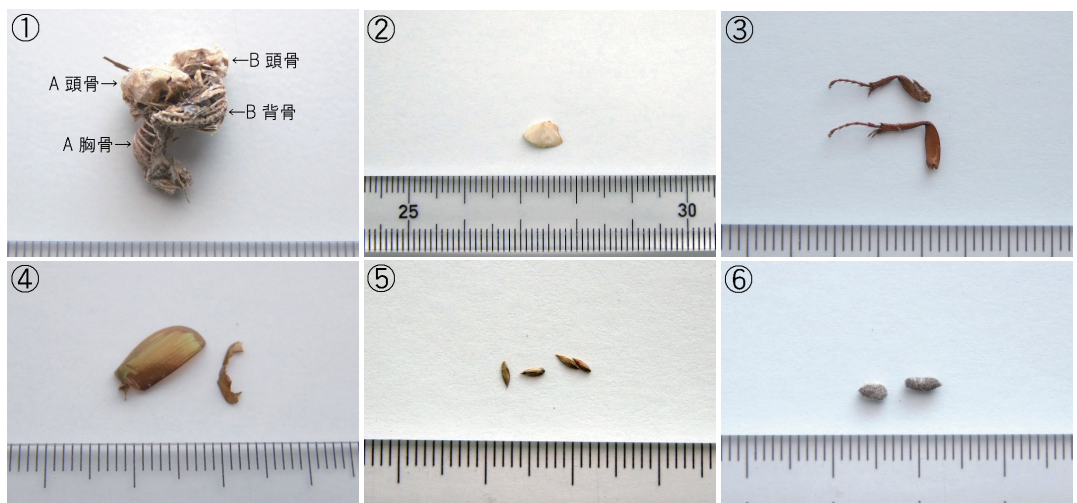


図7. 巣内残留物一覧。① 獣死体(A-B 2個体)；② 昆虫類の殻片；③ コウチュウ目の脚部；④ コガネムシ科コガネムシの前羽、破片；⑤ メヒシバの種子；⑥ 糞粒(中糞 3 mm, 4 mm)。

■ 考察

1. 巣材と球巣の高さ

球巣の巣材は全国的にはススキ、チガヤ、エノコログサを使用した例が多く、高さは地上から0.70-2.00 m (財団法人リバーフロント整備センター, 1996), 0.80-1.65 m (水野ほか, 2004), 0.70-0.80 m (宮田, 2005) と、文献により若干の差が見られるが、概ね0.70-1.10 m という高さが

一般的である (白石, 1964, 阿部ほか, 2005 等)。

今回の調査では、巣材はオギを使用したものが多く、球巣の高さは平均1.25 m, 2.00 m を超えるものも数例確認された。船越ら (2004) の調査結果でも、川内川流域でオギを使用した球巣は地上から1.26 m, 1.40 m, 1.60 m と、他の巣材を使用した球巣より高い位置にあった。調査地点ではオギの他にも16種のイネ科植物が巣材として

表1. 球巣データ一覧.

No.	調査日	巣の状態	新古	球巣高 (m)	植物高 (m)	外径 (cm)	外層	内層	居住	糞			残留物
										大	中	小	
1	8/20	完成	古	1.25	2.10	8~10	オギ	有	—	1	1	5	昆虫殻片
2	8/20	途中	古	1.55	3.00	—	オギ	無	—	—	—	—	—
3	8/20	完成	古	2.00	2.40	8~9	オギ	無	—	—	—	—	—
4	8/20	完成	古	1.60	2.50	—	オギ	無	—	—	—	—	—
5	8/20	完成	古	1.65	2.40	7~8	オギ	無	—	—	—	—	—
6	8/20	完成	中	1.03	1.80	8~8	オギ	有	—	—	—	—	—
7	8/20	完成	新	0.78	1.80	7~8	オギ, メヒシバ	無	—	—	—	—	—
8	8/20	完成	古	2.20	3.50	7~9	オギ	無	—	—	—	—	—
9	8/20	完成	古	1.43	2.80	8~10	オギ	有	—	—	—	—	—
10	8/20	途中	古	1.42	2.00	—	オギ	無	—	—	—	—	—
11	8/20	途中	古	1.30	1.70	—	オギ	無	—	—	—	—	—
12	8/19	完成	中	1.90	2.40	7~9	オギ	無	—	—	—	—	—
13	8/19	完成	古	1.70	2.40	—	オギ	無	—	—	—	—	—
14	8/19	完成	古	1.20	2.00	7~9	オギ	有	—	—	1	—	—
15	8/19	完成	古	1.20	1.80	7~9	オギ	有	—	—	—	—	—
16	8/19	完成	古	1.00	1.50	7~10	セイタカヨシ, ヨモギ	有	—	—	—	—	—
17	8/19	途中	古	1.60	2.40	—	オギ	無	—	—	—	—	—
18	8/19	完成	中	1.05	1.70	7~9	オギ, チガヤ	有	—	—	1	—	—
19	8/19	完成	古	1.15	1.80	7~9	オギ	有	—	—	—	—	—
20	8/19	完成	古	1.50	2.00	—	オギ	無	—	—	—	—	—
21	8/19	完成	中	1.50	2.00	7~9	オギ	有	—	—	3	—	—
22	8/19	完成	中	1.00	1.50	7~9	オギ	無	—	—	—	—	—
23	8/19	完成	中	1.00	2.00	8~8	オギ	無	—	—	—	—	—
24	8/18	完成	古	0.95	2.40	7~9	オギ	有	—	—	—	—	種子, 甲虫脚
25	8/18	完成	新	2.40	2.40	7~9	オギ	無	—	—	—	—	—
26	8/18	完成	古	2.00	2.00	7~10	オギ	無	—	—	—	—	コガネムシ羽
27	8/18	完成	中	2.20	2.20	9~9	オギ	有	死体 2	—	—	—	種子
28	8/18	完成	中	1.70	2.40	9~10	オギ, ヒメムカシヨモギ	無	—	—	—	—	—
29	8/18	完成	古	1.70	2.40	7~9	オギ	有	—	—	3	—	—
30	8/18	完成	中	1.70	2.40	7~9	オギ, ヒメムカシヨモギ	無	—	—	—	—	—
31	8/18	完成	中	1.60	2.00	9~10	オギ	無	—	—	—	—	—
32	8/18	完成	中	0.95	1.70	7~8	オギ, セイタカアワダチソウ	有	—	—	1	—	—
33	8/18	途中	新	0.90	1.60	—	オギ	無	—	—	—	—	—
34	8/18	完成	新	0.90	2.00	7~8	オギ	有	—	—	17	—	—
35	8/18	完成	中	1.00	2.40	7~9	ツルヨシ, オギ	有	—	—	12	—	—
36	8/18	途中	新	0.90	1.50	—	チガヤ, オギ	無	—	—	—	—	—
37	8/18	途中	新	0.80	1.50	—	チガヤ, オギ	無	—	—	—	—	—
38	8/18	完成	新	0.65	1.30	7~9	オギ, メヒシバ, エノコログサ	有	幼獣 2	—	—	—	種子
39	8/18	完成	新	0.75	1.30	7~7	オギ	有	幼獣 2	—	20<	—	種子
40	8/18	完成	古	1.40	2.00	7~9	オギ	無	—	—	—	—	—
41	8/18	途中	古	1.60	2.40	—	オギ	無	—	—	—	—	—
42	8/18	完成	中	1.30	2.00	8~9	オギ	有	—	—	2	—	種子
43	8/18	完成	中	1.10	1.80	6~9	ススキ	有	—	—	20<	—	—
44	8/18	途中	新	0.75	1.20	—	チガヤ	無	—	—	—	—	—
45	8/18	途中	新	0.75	1.20	—	チガヤ	無	—	—	—	—	—
46	8/18	途中	新	0.75	1.20	—	チガヤ	無	—	—	—	—	—
47	8/18	途中	新	0.75	1.20	—	チガヤ	無	—	—	—	—	—
48	8/18	途中	新	0.75	1.20	—	チガヤ	無	—	—	—	—	—
49	8/18	完成	新	0.75	1.20	7~9	チガヤ	有	幼獣 3	—	—	—	—
50	8/18	完成	中	1.10	2.00	8~8	チガヤ	有	—	—	—	—	—
51	8/18	完成	中	0.65	0.90	9~10	チガヤ	有	—	—	3	—	—
52	8/18	途中	新	1.10	1.20	—	ケイヌビエ	無	—	—	—	—	—
53	8/18	完成	中	1.00	1.60	7~9	ケイヌビエ	有	—	—	20<	—	種子
54	8/18	途中	中	2.00	2.40	—	オギ	無	—	—	—	—	—
55	8/18	完成	新	1.00	1.40	9~10	オギ	有	幼獣 2	—	—	—	—
56	8/18	完成	中	1.00	1.70	8~9	オギ	有	成獣 1	—	—	6	—
57	8/27	完成	新	0.60	0.80	9~10	イネ	無	成獣 1	—	—	—	—
58	8/27	完成	新	0.60	0.80	7~8	イネ	無	—	—	—	—	—
59	8/27	完成	古	0.60	0.80	9~9	イネ	無	—	—	—	—	—
60	8/27	途中	中	0.60	0.80	—	イネ	無	—	—	—	—	—
61	8/27	途中	新	0.60	0.80	—	イネ	無	—	—	—	—	—

使用されており、オギに集中する理由として川内川でしばしば発生する洪水の回避が挙げられる。カヤネズミが泳げることは知られているものの、洪水時の流量・流速は尋常ではなく、ましてや幼獣が生き残ることは難しい。川内川の河川敷はカヤ場がまとまって確保されている希少な環境であり、巢材としてのオギの選択は、そこで生活していく上で可能な限り高い位置に営巣しようとした結果と考えられる。

2. 夏季の繁殖への対応

繁殖期は、九州では春季から秋季の二山形が一般的であり、鹿児島県においても夏季の繁殖は稀とされている（鹿児島県，2003）。それに対し、関東地方では夏季のみとされる。しかし今回の調

査では夏季と秋季の球巣数に差はなく、1層及び2層構造の構成も明確な差は見られない。夏季にも多数の2層構造の球巣や約10個体（死体含む）の幼獣が確認されている。

夏季に確認された球巣は外層も内層も葉だけ使用したものがほとんどで、秋季は内層にオギの穂を使用したものが約3割見られた。春季にはチガヤの穂が巢材として使用される例があり（白石，1988），寒暖の差が激しい春季と秋季は穂による保温効果を期待し、夏季は保温の必要が無いため、通気性の良い葉のみ使用していると考えられる。また9月7日には幼獣の体温調節行動を確認した。球巣は植物本体と繋がっているため、緑陰と水分の蒸散効果による猛暑の軽減が期待できるが、そ

表1. 球巣データ一覧（つづき）.

No.	調査日	巢の形状	新古	球巣高(m)	植物高(m)	外径(cm)	外層	内層	居住	大 中 小			糞	残留物
										大	中	小		
62	11/1	完成	古	0.70	1.10	8~9	チガヤ	無	有	—	—	—	—	—
63	11/1	完成	新	1.20	1.70	7~9	オギ	有	有	—	—	—	—	種子
64	11/1	完成	新	1.40	2.40	8~10	オギ	有	有	—	50<	50<	50<	—
65	11/1	途中	新	1.65	2.40	—	オギ	無	無	—	—	—	—	—
66	11/1	途中	新	1.56	2.40	—	オギ, カナムグラ	無	無	—	—	—	—	—
67	11/1	途中	中	1.35	2.40	—	オギ	無	無	—	—	—	—	—
68	11/1	完成	古	1.25	1.80	7~8	オギ	無	無	—	—	—	—	—
69	10/31	完成	古	1.70	2.10	6~8	オギ, マメ科 sp.	有	有	—	50<	50<	50<	—
70	10/31	完成	古	0.95	1.40	8~9	オギ	有	有	—	—	—	2	種子
71	10/31	途中	古	0.70	1.40	—	オギ	無	無	—	—	—	—	—
72	10/31	途中	古	0.80	1.40	—	チガヤ	無	無	—	—	—	—	—
73	10/31	完成	古	0.85	1.50	9~9	オギ	無	無	—	—	—	—	—
74	10/31	完成	古	0.90	1.50	9~10	オギ, ヒメムカシヨモギ	無	無	幼獣6	50<	50<	50<	—
75	10/31	完成	古	1.33	1.80	8~10	オギ	無	無	—	—	—	—	—
76	10/31	完成	古	0.75	1.30	10~11	チガヤ	無	無	—	2	—	—	—
77	10/31	完成	古	0.90	1.60	8~9	チガヤ	無	無	—	4	4	—	—
78	10/31	完成	古	2.00	2.50	7~8	オギ	無	無	—	—	—	5	—
79	10/31	完成	古	1.45	1.80	9~9	オギ	有	有	—	50<	50<	50<	—
80	10/31	完成	中	1.15	1.40	7~8	オギ, ヒメムカシヨモギ	有	有	—	6	3	—	—
81	10/31	完成	古	1.20	1.70	7~8	オギ	有	有	—	50<	50<	50<	—
82	10/31	完成	中	1.75	2.00	8~8	オギ	有	有	—	3	—	2	—
83	10/31	完成	中	1.30	1.75	8~8	オギ	有	有	—	—	5>	50<	—
84	10/31	完成	中	1.35	1.80	8~9	オギ	有	有	—	—	—	—	—
85	10/31	完成	古	0.90	1.32	—	オギ	不明	不明	—	—	—	—	—
86	10/31	完成	古	1.55	2.40	—	オギ	無	無	—	10	—	—	—
87	10/31	途中	古	0.80	1.10	—	オギ	無	無	—	—	—	—	—
88	10/31	途中	中	1.05	1.20	—	オギ	無	無	—	—	—	—	—
89	10/31	完成	中	1.05	1.35	7~8	オギ, メヒシバ, キンエノコロ	有	有	—	—	—	1	—
90	10/31	完成	新	1.25	1.80	7~9	オギ	不明	不明	—	—	—	—	—
91	10/31	完成	新	0.95	1.60	8~9	オギ, メヒシバ	有	有	—	—	—	—	マメ科鞘
92	10/31	途中	新	0.95	1.10	—	オギ	無	無	—	—	—	—	—
93	10/31	完成	中	1.05	1.20	6~7	オギ	有	有	—	—	—	—	—
94	10/31	完成	中	0.95	1.25	8~9	オギ	有	有	—	50<	50<	50<	—
95	10/31	途中	中	0.70	1.00	—	オギ	無	無	—	—	—	—	—
96	10/31	完成	新	0.85	1.10	9~10	オギ	無	無	—	—	6	—	種子
97	10/31	完成	中	0.70	1.10	8~8	オギ	有	有	—	—	—	—	—
98	10/31	完成	中	0.75	1.20	7~8	オギ	有	有	—	50<	50<	50<	—
99	10/31	完成	新	1.00	1.40	8~9	オギ	有	有	幼獣1	50<	50<	50<	—
100	10/31	完成	中	1.00	1.40	9~10	オギ	有	有	—	50<	50<	50<	種子
101	10/31	完成	新	0.90	1.35	8~8	オギ	有	有	—	50<	50<	50<	種子
102	10/31	途中	古	1.00	1.70	—	オギ	無	無	—	—	—	—	—
103	10/31	完成	古	0.65	1.00	—	オギ, メヒシバ	有	有	—	50<	50<	50<	種子
104	10/31	完成	中	0.70	1.00	6~7	メヒシバ, チガヤ	有	有	—	50<	50<	50<	—
105	10/31	完成	中	1.00	1.50	8~10	ススキ, チガヤ	有	有	—	5	—	—	—
106	10/31	完成	古	0.65	1.20	7~9	チガヤ, セイタカヨシ	有	有	—	5	—	50<	—
107	10/31	途中	古	0.75	1.20	—	チガヤ	無	無	—	—	—	—	—
108	10/31	完成	新	1.10	1.50	7~10	チガヤ	不明	不明	—	—	—	—	—
109	10/31	完成	古	0.80	1.40	7~9	チガヤ	無	無	—	—	—	—	—
110	10/31	途中	中	0.75	1.60	—	チガヤ	無	無	—	—	—	—	—
111	10/31	完成	古	0.77	1.20	8~9	チガヤ	有	有	—	50<	50<	50<	死体
112	10/31	完成	中	0.80	1.00	9~10	チガヤ, タチスズメノヒエ	有	有	—	50<	50<	5>	—
113	10/31	完成	古	0.75	1.05	9~10	チガヤ	有	有	—	50<	50<	50<	—
114	10/31	完成	中	0.80	1.10	8~9	チガヤ	不明	不明	—	—	—	—	—
115	10/31	完成	中	0.65	1.20	5~7	チガヤ	有	有	—	—	—	50<	—
116	10/31	完成	中	0.90	1.20	7~8	チガヤ	有	有	—	1	1	1	—
117	10/31	完成	古	0.70	1.20	7~8	オギ, チガヤ	有	有	—	—	—	—	—
118	10/31	完成	古	0.45	1.30	7~7	オギ	無	無	—	—	—	—	—



図8. 巢外で体温調節を行う幼獣（目視確認）。①巢からぶら下がっている個体；②足を投げ出している個体；③巢内外の移動を数回繰り返す。

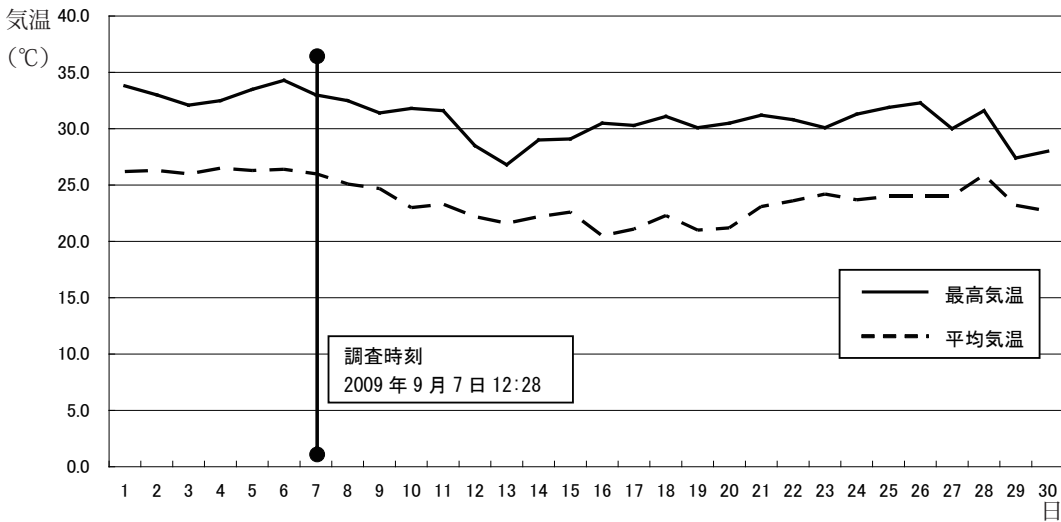


図9. 2009年9月の気温（鹿兒島県伊佐市）。気象庁 HP 過去の気象データ検索より抜粋。

れでも巢内の温度が上昇したため、「草いきれ」を避け、巢外に出てきたと考えられる。これら一連の行動により、猛暑日の多い夏季の繁殖を可能にしたと考えられ、川内川流域では夏季も普通に繁殖していることが判明した。

3. 球巢内の行動

カヤネズミは日中・夜間を問わず、3時間ごとに摂餌と睡眠を繰り返し、排便は巢外で行うとされている（秋田ほか，1972）。今回球巢内の残留物として、15個の球巢で昆虫の脚部や前羽、種子等を確認し、45個の球巢で大小の糞を大量に確認した。どの食痕もカヤネズミの食性に合致しており、また巢内で排便が行われていることを示唆している。なお糞の大部分は内層から外層の隙間に入り込んでおり、身体に直接糞が触れること

なく、巢内は清潔に保たれている。糞の放置は病気の発生に繋がるため、種によって成獣が食べてしまう、巢外へ持ち出す等の処理が知られているが、カヤネズミは巢の構造によりそれを解決している。

巢への出入りは外敵に発見されやすく、リスクの高い行為と言える。育児期の雌は球巢内で食事と排便を行い、さらに球巢自体に糞の収納スペースを設けることで巢に出入りする頻度を減らし、繁殖におけるリスクを軽減していると考えられる。

野生生物の行動や技術は我々の想像を超える場合があり、これまで生態系サービスの一環（供給的サービス：蜂の巣のハニカム構造、フクロウの羽の形状、カワセミの嘴の形状等）として広く

活用されてきた。今回の調査によりカヤネズミの生態の一部が解明され、球巣構造についても知見が得られたが、未だ知られていないメカニズムが隠されている可能性があり、今後も研究対象として研鑽を重ねていきたい。

■ 謝辞

本報告をとりまとめるにあたり、協力をいただいた、中村正二、角成生、今吉努、江口雄一、橋口政信、徳永修治、下沖洋人の諸氏に深くお礼申し上げる。

■ 引用文献

- 秋田正人ほか. 1972. アニマルライフ 動物の大世界百科 第6巻. 日本オール・オーダー社 1081-1082.
- 阿部永. 2005. 日本の哺乳類 [改訂版]. 東海大学出版会.
- 鹿児島県. 2003. 鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物 動物編.
- 環境省 自然環境局 生物多様性センター. 2008. モニタリングサイト 1000 里地 調査マニュアル カヤネズミ.
- 黒田貴綱・勝野武彦. 2006. 多摩丘陵におけるカヤネズミの生息分布から見た生息適地の景観構造. *The Japanese Institute of Landscape Architecture* 553-556.
- 国土交通省. 2006. 平成 18 年度河川水辺の国勢調査基本調査マニュアル [河川版]. 財団法人リバーフロント整備センター (HP より).
- 子安和弘. 1994. フィールドガイド足跡図鑑. 日経サイエンス社.
- 財団法人リバーフロント整備センター. 1996. 川の生物図典.
- 鮫島正道. 1997. 「大隅の自然」大隅の哺乳類相. 鹿児島県立博物館編.
- 白石哲. 1964. 九州産カヤネズミの生態について. *衛生動物* 15(2): 115.
- 白石哲. 1988. カヤ原の空中建築家 カヤネズミの四季. 文研出版.
- 全国カヤネズミネットワーク. 2003. 全国カヤマップ 2002 特別版 - カヤ原保全への提言. 全国カヤネズミネットワーク編
- 畠佐代子・夏原由博. 2006. 滋賀県におけるカヤネズミの生息適地要因. *The Japanese Institute of Landscape Architecture* 549-552.
- 船越 公威・山下 佳之. 2004. 鹿児島県産のカヤネズミの分布と生態. *自然愛護*, 鹿児島県自然愛護協会 30: 1-4.
- 水野昭憲ほか. 2004. 金沢大学角間キャンパスから新たに記録されたカヤネズミ.
- 宮田桂子. 2005. カヤネズミのゆりかご作りー日本で一番小さなネズミの巣作り行動ー. *哺乳類科学* 45(1): 51-54.